

孵化

磯伝いに歩く僕の耳に
届くときもあれば
届かないときもある

それは潮騒なのか
それとも
ピアノの単旋律の粒なのか

届くか届かないかの狭間で
僕のうたは目覚め
大気へと溶け出してゆこうとする

僕にはそれを制御することはできない
それとともに
僕自身のうち慄えるような歓びまで蒸発してゆくことも

お前の孵化した後には
僕の中に残されるものは
ただ、凧いだ漆黒の夜の海だけだろう

心地よい疲れが僕を包み込みはじめている
そろそろ一休みしてもよい頃合だ
陽射しに暖められた岩に腰を下ろして

潮溜まりを覗き込むと
ゆらゆらと
イソギンチャクの触手が靡いている

次第に薄れてゆく歓びのずっと彼方に
僕は見る
大気となって漂うお前を

(2007.2.23)